

# 機械カニバリズム——人間なきあとの人類学へ

久保明教

## 【DRAFT ONLY】

：本稿は久保明教 2018『機械カニバリズム——人間なきあとの人類学へ』（講談社）一章の著者草稿を、出版社の許可を得たうえで公開するものです。書籍とは記述や頁数表記が異なります。本稿からの引用・転載はお控えください。

## はじめに

近い将来、人間に似た形状や能力をもつロボットやA Iが日常生活の隅々にまで浸透するだろう。私たちはこうした未来予測を多かれ少なかれ実現可能なものとして受けとっている。いつか、「鉄腕アトム」や「ドラえもん」のような機械のパートナーと生まれた時から一緒に育つ幸福な世代が現れるかもしれない。「二〇〇一年宇宙の旅」や「ターミネーター」で描かれたように、機械に反逆され支配されるディストピアが実現してしまうかもしれない。現代にも予兆を見いだすことはできる。インターネットやスマートフォンに代表され

る情報通信技術は、私たちの生活をより自由で豊かなものにしたようにも見えるし、高度なモバイル端末に耽溺する無数の人間を生みだしてコミュニケーションの希薄化やネット炎上といった様々な問題を引きおこしているようにも見えるだろう。

私たちは機械を愛し、憎んでいる。様々な能力において人間を超える機械の登場を期待する一方、どこか拭いがたい恐怖を感じている。だが、そもそも機械とはどのような存在であるのか／ありうるのかについて考えることは稀だろう。人々の関心はむしろ、自分たち人間がいかにかに生き、いかなる関係を他者と築き、どのような社会を作りあげていくのかに向けられる。テクノロジーはあくまで道具であり、人間が特定の目的を達成するための手段にすぎない。そう考えることで、私たちはテクノロジーから人間へと関心の焦点を移す。後者は前者の下位要素にすぎない。いくら発達した機械といえども人間の生活を便利にするための手段に過ぎないのだから、真に重要なのはテクノロジーの進歩ではなく、それを通じた人間社会の進歩なのだ。そう考える人も少なくないだろう。

しかしながら、私たち人間のあり方自体が、テクノロジーによって大きな影響を被っていることは否定できない。あなたの日常から電車やインターネットやスマートフォンが突如として失われたら、あなたはどのような生活をおくり、どのような人間になるだろうか？ 仮定の話を考えるまでもない。あなたの日常から、駅の掲示板（物理）やレコードプレーヤー、MDや固定電話やポケベル、あるいはガラケーやテレビが消えたことで、あなたの人間としてのふるまいや考え方はどのように変わってきただろうか？ 現代社会の隅々に浸透している様々な機械は、私たちのあり方を規定する重要な一部をなしている。機械を道具として用いる人間のあり方自体が機械から大きな影響を受けて形成されていることを考えれば、機械と人間を「道具とその使用者」としてシンプルに対置することは難しくなる。

本書では、私たちが機械の側から自分自身を捉えることによって、私たち自身のあり方を変えていくプロセスに注目する。技術的には単なるハードウェアやソフトウェアだと言うこともできる装置に人間が自らと近いものを見いだすことで、様々な機械が「ロボット」や「AI」と呼ばれるようになる。工学者や計算機学者はロボットやAIを作りあげることによって、単に便利な道具を開発することだけでなく、機械を通じて人間を理解することをも

試みてきた。日常の様々な出来事や自らの意見をブログやSNSに書きこむ人々は、自らの日々の営みをせつせと機械が処理できる情報に置き換えている。SNSに書き込まれる日常生活のありかた自体がSNSの影響によって変化しているように、知的な機械を通じて理解される人間のあり方もまた従来の人間観とは異なるものとなるだろう。

人類学者エドゥアルド・ヴェヴェイロス・デ・カストロは、南米におけるカニバリズム（食人）を「他者の視点から自らを捉え、自己を他者としてつくりあげるための営為」として描きだした。本書では、彼の議論を踏まえて、機械という他者の視点から自己を捉え自己を変化させていく営為を「機械のカニバリズム」と呼び、その問題点と可能性を探っていく。機械が単なる道具ではなくなり、私たち自身の存在のあり方を問いかける相手として迫ってくる。こうした状況の範例として、以下で中心的に論じられるのは人間の棋士とソフトが戦った将棋電王戦シリーズである。そこで見いだされるのは、将棋という世界に生じる出来事を評価し判断するものが人間でも機械でもありうるような状況であり、人間なるものによってこの世界を根拠づけることが不可能になったとき、私たちはいかに生きていけるのかという問いである。

電王戦から発せられた問いは、深く広く掘り下げられ、インターネットやSNSを通じた私たちのコミュニケーションや自己のあり方の変容へと結びつけられていく。AIブーム、将棋ソフト開発、現代将棋の変容、SNS、生政治学、計算主義批判、モニタリング社会、様々なトピックが濁流のように連なっていく本書の記述は、私たちが自らを同一視している「人間」という形象から離脱する可能性とその困難を探る「人間なきあとの人類学」の構想へと向かう。機械は単なる道具だ、そう言いながら私たちは機械を愛し、恐れている。私たち自身のあり方が様々な機械との関係において生みだされているのであれば、機械とはいかなる存在であるのかという問いは、以下の問いとストレートにつながっていく。いったい私たちはいかなる存在であり、いかなる存在でありうるのだろうか。

## 第一章 現在のなかの未来

### それは制御できるのか

「十分に発達した科学技術は、魔術と見分けがつかない」。

SF作家アーサー・C・クラークの名を知らなくても、彼が遺したこの表現をどこかで聞いたことのある人は少なくないだろう。ただし、先端技術を魔術のように感じるのは私たち一般人であり、どれほど驚異的なテクノロジーであっても、その仕組みを理解できる専門家がどこかにいるだろうことを前提として、この表現は受けいれられている。

しかし、近年急速な発展を見せる「人工知能」(AI)は、こうした前提を突きくずしつつある。現代のAIブームの中核をなす「ディープラーニング」は、多層ニューラルネットワーク、機械学習、ベイジ理論、脳神経科学、ネット上の膨大なデータなどを結びつけることで、画像認識や音声認識において劇的な成果をあげてきた。これらの技術の詳細を知らない人が大半だろうが、二〇一二年にグーグルが発表した「猫」の顔を認識するニューラルネットワークの開発で培われた機械学習技術は、モバイル端末用OS「アンドロイド」による音声認識の精度向上という仕方で、私たちの日常にもすでに入り込んでいる。だが、ディープラーニングの内部メカニズムの全てが解明されているわけではない。もちろん膨大なデータからパターンを抽出していく機械学習のプロセスは人間が書いたプログラムに従って行われるが、学習の成果である複雑な認識システムは、開発者や専門家であっても完全には把握できないものとなる。

人間の作った機械が、人間の理解を超えていく。こうした事態は、「近い未来にあらゆる知的能力において人間を超えるコンピュータが登場し、文明の発展史がそこから先が全く予測できなくなるような特異点 (Singularity) に辿りつくだろう」という、一九八〇年代に提唱されて以来それほど注目されていなかったシンギュラリティ仮説に息を吹き込んだ。「ビッグデータ」、「IoT (Internet of Things)」、「第四次産業革命 (Industry 4.0)」といったキャッチフレーズを通じて、AIの発展は、情報技術に留まらない産業構造全体の変化を促し、多くのビジネスチャンスを生み出す源泉として喧伝されていく。その一方、現存する

職業の半数弱が今後10～20年のあいだにコンピュータに奪われるのではという見解も示され

(1)、A I による生産力と失業者の増大に見合う需要を確保するためにベーシックインカム制度の導入が提唱されてもいる (2)。

こうした状況のなか、理論物理学者スティーブ・ホーキングや計算機科学者スチュアート・ラッセルらは、英インディペンデント紙に寄稿した連名の記事において次のように述べている。A I の発展によって戦争や病気や貧困の根絶さえ期待できる一方で、高度に発達したA I が金融市場の裏をかき、科学者を誤らせ、政治家や企業家を混乱させ、私たちに理解できない兵器を開発してしまうこともありうる。予想されるリスクを回避することを学ばなければ、A I の創造は人類史における最大にして最後の出来事となりかねない。A I がいかなる影響を与えるかは、短期的には「誰がそれを制御するか」にかかっているが、長期的には「そもそもそれは制御できるのか」にかかっている (3)。

2010年代の後半にさしかかった現在の状況は、人工知能研究が開始された1950～60年代、エキスパートシステムに注目が集まった1980年代に続く、第三次のA I ブームとされる。第一次・第二次ブームが計算機科学の専門家による研究開発を中心としていたのに対して、第三次ブームでは、グーグル、IBM、フェイスブック、アマゾンといった世界的企業が研究開発を主導しており、その成果は、モバイル端末の支援機能（「Siri」や「コルタナ」等）や自動運転車といった、多くの人々にとって身近な技術に導入されつつある。だからこそ、客観的な未来予測というより思想的提言に近いシンギュラリティ仮説にも、簡単には否定できない説得力が宿っている。

だが、「機械が知的能力において人間を超える」とは、いかなる状況を指しているのだろうか？

いつから機械と人間は知性において比較可能な存在になったのか？ どうして甚大なりスクが危惧されながらA I 開発が進められているのか？ なぜ私たちは、コンピュータの計算力を増大させる試みを止めようとししないのか？ そもそも、なぜ機械は制御できるものでなくてはいけないのか？

AIブームは、機械が人間を超える未来に対する希望や恐怖を喚起するだけではない。それは、いつの間にかそうした未来を見ずえる状況にはまりこんでしまった、私たちの現在をめぐる様々な問いを喚起してもいる。だが、そうした問いが正面から取りあげられることは少ない。

シンギュラリティ仮説は、文明の発展史がそこから先が全く「予測できなくなる」特異点がやってくることを「予測する」という独特の矛盾した語り口をなしている。予想される状況の内実は予想できない。したがって、その予想される未来に対処する処方箋として考案される方策は、それ自体が新しかろうが古かろうが革新的なものであるかのように見える。対処の対象がどうみても革新的だからである。いまや「イノベーション」という言葉は、非政治的な革命への希望や<sup>カウンターカルチャー</sup>対抗文化の旗印として密やかに掲げられるものではなく、行政機関や地方自治体や一流企業においてこそ蔓延する言葉となっている。規範化され体制化したイノベーションを容易に実現させてくれる便利な概念として「シンギュラリティ」は一定の説得力を帯びている。こうして私たちは未来へと追い立てられる。だが、予測できないことを予測するという二重の構えは、人間が機械に追い抜かれる未来を予測することを通じて、そうした未来を人間が制御できるという発想を強化する。あたかも、「私たち人間」なるものが発展する知能機械によってこの世界への支配権を失うか、私たち人間が知能機械を制御することでこの世界への支配権を維持するかの二者択一しか残されていないかのようだ。だが、本当にそんな発想しかできないのだろうか？

筆者自身は、機械に支配されたくないわけでも、機械を支配したいわけでもない。機械との平和な共存を望んでいるわけでもない。むしろ、機械との関係において支配か被支配かの二者択一（あるいはその裏面としての共存という理念）に追い込まれるしかない「人間なるもの」に正直嫌気がさしている。私は、そのような「人間なるもの」の一部として生きていたくない。だから、そのような「人間」とは異なるものとして私たち自身のあり方を構想しなおしたい。

こうした問題意識を発端とする本書は、したがって、AIが人間を超える未来とはどのようなものであるかを予測し、そうした未来に向かっていかなる対策を講じるべきなのかを考

えるものではない。むしろ、ここで扱われるのは、現代を生きる私たちは何故そのような未来を予想してしまうのか、予想される未来とは異なる道筋を現在のなかにかに見いだすことができるのか、といった問いである。いふならば本書は「現在のなかの未来」の可変性をあぶりだす試みとなる。AIやロボットと呼ばれる知能機械の発展が私たち人間にもたらす影響を予想するのではなく、そもそも知能機械と人々がおりなす関係をいかなるものとして捉えることができるのか、テクノロジーの発展に希望と脅威を感じている私たちとは何ものであり、そして、何ものでありうるのかを考えたい。

そのために、序章となる本章ではまず、人工知能をめぐる現在の状況を、科学技術論や現代人類学の観点から考察する。本章の議論をふまえて、2章からは、知能機械と人間が織りなす相互作用の先駆的なモデルケースとして、プロ棋士とAI将棋ソフトが競い合った「将棋電王戦」をとりあげる。プロ棋士と将棋ソフトの対局の軌跡やその影響を検討し、高度な知的能力をもつ機械と人間がおりなす関係性のあり方がどのようなものでありうるかを考察する。将棋電王戦をめぐる二～五章の議論が、現在から少し未来へと踏みだした地平を探索するものであるのに対して、続く六～七章では、インターネット上のコミュニケーションの変容を中心的に取りあげ、近い過去から現在に至るまでにおいて、知能機械と私たちの関係性がいかなるものになってきたのかを検討する。二つのパートの議論を踏まえ、第八章では知能機械との相互作用を通じて<私たち=人間>なるものを捉え直していく道筋を探求する。AIの未来を展望する議論の多くが、<過去⇒現在⇒未来>という直線的な時間に沿って展開されるのに対して、本書ではむしろ「近い未来」と「近い過去」によって現在を挟み込むことによって、AIの進展する未来を期待と恐れをもって見つめている、現在の私たちの可変性を炙りだすことを試みる。

## 二〇世紀の技術論

現在、新聞や雑誌、ネットメディアや一般書で流通しているAIをめぐる言説の多くは、二つの論調の組み合わせによって構成されている。第一に、著名な研究者や企業家の知見や研究成果や実用化の例をあげることで、AIの研究開発が急速かつ自動的に進んでいること

を強調するものであり、第二に、AIの発展が引き起こす失業者の増大や経済的混乱などのリスクを列挙し、ディストピアを避けるために必要になるだろう規制や対策について考察するものである。前者では、先端テクノロジーによって社会が変わっていくプロセスが強調され、後者では先端テクノロジーが良い影響をもたらすように社会的な合意に基づいて制御していくプロセスが強調される。

この二種類の論調は、科学技術をめぐる二〇世紀の思想を二分してきた「技術決定論」と「技術の社会的構成論」の発想に対応している。技術決定論は、技術の本質主義、自律説、自立的存在論とも呼ばれ、技術をそれ自体に内在する論理や推進力を持った自律的な存在とみなす立場である。とりわけ産業革命以降の技術は、自動性、唯一性、空間的・時間的な普遍性、自律的な拡張性をもって世界のすべてを管理の対象として支配するものであるとされる(4)。その影響がポジティブかネガティブかに関わらず、社会が技術のあり方を決定するのではなく、技術が社会のありかたを決定するということだ。科学技術を進展させているのは結局のところ社会に生きる人間なのだから自律的ではないはずだ、と反論したくなる人もいよう。だが、現に私たちは自動車の最高速度が上がり、スマートフォンの通信網が拡充し、コンピュータの計算速度が速くなることをなかば自動的な現象として捉えており、「より便利になるのだから当然だ」と考えている。技術決定論を否定することは簡単ではない。

技術決定論に対する批判的立場として二〇世紀後半に台頭した社会的構成論は、技術の非自律説、道具説とも呼ばれ、技術は特定の社会(集団)が特定の目的を達成するための中立的な手段であるとみなす立場である。人間が何からの目的を達成するための道具ないし手段として技術を捉える考え方は常識的なものであるが、社会構成論は、その手段=目的関係が社会的な交渉や合意を通じて構成されるという点を特に強調するものであった。テクノロジーの発展は技術に内在する論理によって方向づけられるのではなく、社会的・文化的な要因によって決定されるものであり、具体的な技術の有様は、関連する社会集団のあいだの対立や交渉の結果、その技術をめぐる「解釈の柔軟性」(5)が次第に縮減されることによって構成される。技術が社会のありかたを決定するのではなく、社会が技術のありかたを決定する。

例えば、階段は多くの人々にとってすみやかに高所や低所に移動できる便利な装置として捉えられるが、車椅子に乗る人々にとってはそこから先に進めなくなる障壁として解釈される。現在の公共施設や鉄道駅の多くに見られるスロープが併設された階段は、「バリアフリー」という、より多くの人々が許容できるしかたで階段をめぐる解釈の柔軟性が縮減された結果だと言えるだろう。

ただし、技術決定論と社会的構成論は、技術と社会を別個の領域として捉えた上で両者のどちらかに私たちが生きる世界の状態をうみだす最終的な根拠を置く、という点では同型である（いずれに根拠を置くかの違いにすぎない）。両者の対立は、技術／社会という二項対立のどちらの領域がもうひとつの領域の上位にたち、それを規定するのかをめぐって生じる。これに対して、そもそも科学技術と社会という二項対立を前提とすること自体を批判したのが、1980年代から提唱されてきたアクターネットワーク論（Actor Network Theory：ANT）である。

## 銃と既読スルー

アクターネットワーク論の主な推進者の一人である哲学者・人類学者ブルーノ・ラトゥールは、技術をめぐる従来の議論を、人間と非人間（nonhuman）の関係を一方による他方の支配という図式に還元するものとして批判する。

図式的に整理すれば、科学技術を中立的な道具とみなす社会的構成論では、技術的人工物がいかに作られ使用されるかは人間の欲求や意図によって規定されると考える。これに対して、科学技術をそれ自体の推進力をもった自律的な営為とみなす技術決定論では、技術的装置がいかに作られ配置されるかによって人間の行為や意図自体が規定されると考える。前者の発想では、技術は人間が自らの目標を実現するための単なる仲介項（Intermediary）となり、社会関係に対して副次／従属的なものとなる。後者の発想では、人間は技術が特定の目標を実現するための単なる仲介項となり、科学技術が外部から社会を変化させる。いずれにおいても、様々な現象が人間の側か非人間の側に還元して理解される。人間と技術の接続を通じて生じる状況を両者のどちらかを主語として捉えることは、私たちの日常においても頻発す

る語り口であろう。だが、ラトールによれば、技術によって生じるのは、むしろ人間と非人間が互いの性質を交換しあいながら共に変化するという事態であり、両者は互いの媒介（Mediation）となることで新たな行為のかたちを生みだしていく。そこにおいて、人間以外の存在者もまた、固有の形態や性質を持った行為者（「エージェント」、「アクター」、「アクタント」等と呼ばれる）として、人間を含む他の行為者と関係しながら特定の現実を構成している。

ラトールの挙げる次のような例を考えてみよう（図1）。市民（人間）と銃（非人間）という二つのエージェントが結びつく時、両者が合成されて新たなエージェント「市民+銃」が現れる。この第三のエージェントの働きが、第一のエージェント（人間）に内在する意図（目的①）に完全に従うと考えると、「善良な市民は銃を持っていても発砲などしない」という道具説的な説明になる。一方、銃という第二のエージェントに内在する「人を殺す」という機能（目的②）に完全に従うと考えると、「善良な市民でも銃を持てば殺人を犯しかねない」という自律説的な説明になる。

しかし、より一般的には第三の可能性が実現される。二つのエージェントが互いに互いの媒介として働くとき、それぞれが元々持っていた目的が「翻訳」（translate）される（図1）。例えば、相手を殺すつもり（目的①）で銃（エージェント2、その殺傷能力=目的②）を手にした人（エージェント1）であっても、手にした銃の重さに我にかえって、殺人をやめるかもしれないし、銃を脅迫に使うて相手を屈服させようとするかもしれないし、銃で人を撃とうと考えた自分に嫌気がさして自殺してしまうかもしれない。こうして、あらかじめ存在する目的①、②とは異なる新しい目的③（殺人の中止／脅迫／自殺）が生みだされる。ラトールの言う「翻訳」は、言語の翻訳に擬えて行為者同士の相互作用を捉えるものであるが、その相互作用は、原語と訳語が一体一で対応しているという言語的な翻訳の一般的なイメージとは著しく異なる。言うなればそれは、翻訳を通じて原語と訳語の意味が共に変化していくような過程である。異なる行為者が互いに結びつくことによって、それぞれの行為の向かう先があらかじめ確定できない仕方で変化していく。その過程をラトールは「翻訳」と呼んでいるのだ。

こうしたラトウールの発想は、一見すると道具説（社会的構成論）と自律説（技術決定論）の折衷案のように思われるだろう。だが、そこには前二者とは決定的に異なる要素が含まれている。道具説や自律説では、行為を規定する最終的な根拠があらかじめ技術と人間のどちらかに与えられている。だが、アクターネットワーク論（ANT）において行為を規定するのは技術と人間が結びついて生みだされる第三のエージェント、人間と非人間のハイブリッドである。したがって、ANTの発想を正面から受けとめれば、そもそも人間は技術を制御できないし、制御などしていないことになる。もちろん、技術的人工物と結びついたハイブリッドとしての「人間+銃=銃人間」は、銃を制御している。だが、そもそも、どのような仕方で人間が「銃人間」となるのかを、人間は完全には制御できない。それを規定するのは人間であると同時に銃であり、より正確には、両者がおりなす相互作用である。

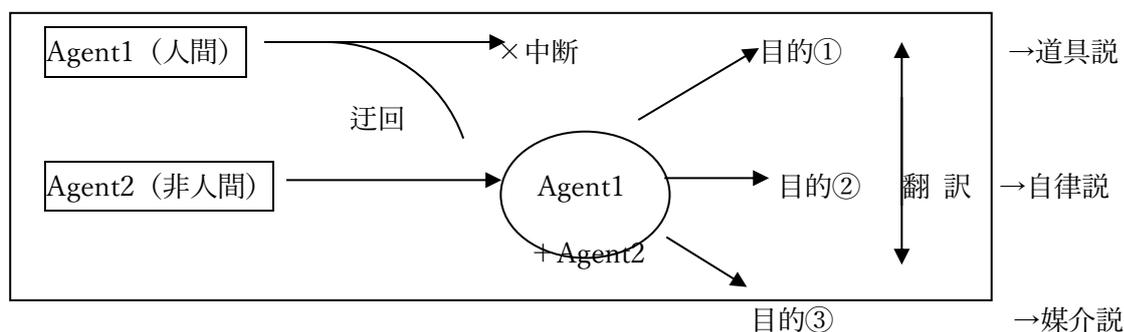


図1：異なるエージェントが結びついた第三のエージェントの行為が向かう先が、人間的エージェントに固有の目的（①）によってあらかじめ規定されていると考えると道具説が、非人間的エージェントにあらかじめ規定されていると考えると自律説が、あらかじめ規定されない未知の目的を生みだすと考えると媒介説が導かれる（6）。

この例は、いささか形式的で抽象的であるように思われるかもしれない。私たちにとってより身近な事例をあげよう。

日本国内で六八〇〇万人を超えるユーザーに利用されているメッセージアプリ「LINE」では、相手のメッセージを読んだことを伝える既読マークがついていながら返信しない行為

が「既読スルー」と呼ばれ、10~20代の若者同士のコミュニケーションにおいて大きな問題となっている。それは円滑なコミュニケーションを阻害する行為として忌避されるために、「既読スルー」と感じられないようにメッセージのやり取りをいかに続け、終わらせるかに常に気を使わなければならない。

しかしながら、「既読スルー」は、LINEというアプリに技術的に実装されている機能ではないし、ユーザーがLINEを使う以前からそのような行為のあり方を望んでいたわけでもない。LINEは、2011年の東日本大震災の三ヶ月後にサービスを開始している。アプリ開発中に生じた震災でスタッフの安否確認をしている際に、メッセージへの返信はなくても読んだことさえ分かればいいのではないか、という発想から既読通知機能が作られたという(7)。

スカイプのチャット機能やインスタントメッセージなど、先行する類似のサービスにおいては、一つの枠組に会話者の一方のメッセージが現れ、それが交互に連なっていくデザインとなっている。これに対してLINEのチャット画面は、ユーザーの発言がふきだしに包まれたものが一つの画面の左右に連なっていき、スタンプマークや写真はふきだしの外に表示される。その画面デザインは、一つの対話空間をユーザーがともに作りあげていくことを強調するものであり、こうしたデザインが、フィーチャーフォン(「ガラケー」とは異なり常時ネットに接続して情報を更新するスマートフォンと結びつくことで、流れるようにメッセージがやり取りされるタイムラインが可能になっている。こうした技術的特徴と、会話の内容以上に会話が同期しながら続いていく「ノリ」を重視するコミュニケーションスタイルが結びつくことで、空間的にも時間的にもバラバラに行動している人間同士が対面的な会話のようにやり取りする「疑似同期」型のコミュニケーションが生みだされている(8)。そこにおいて、既読マークが出ているのに返信しない、同期的な対話の進展を阻害する行為が「既読スルー」として対象化され、忌避されるようになったと考えられる。

既読スルーという行為は、LINEの技術的特徴によっても、それを使うユーザーの社会的性質によっても完全には説明できない。LINEユーザーの中には、既読マークが出ればメッセージが伝わったと考えてそれ以上の発言をやめるものもいるだろう。会話のノリを重視す

る人々にとっても話しかけられて返事をしないのは端的に「無視する」ことであり、LINEとの結びつきがなければ「既読スルー」にはならない。既読スルーは、LINEと若者が結びつくことで生みだされた「LINE人間」という第三のエージェントにおいて、初めて実行可能な行為となったのである。

## 機械への生成

私たちは自律的なテクノロジーに操られているわけではないが、自律的な私たちがテクノロジーを操っているわけでもない。私たちはテクノロジーを制御などしていない。むしろ、私たちはテクノロジーへと生成している。ただし、ここでいう「生成」(becoming)とは、そのものと同一になることを意味するわけではない。市民が銃になるわけでもないし、若者がLINEになるわけでもない。市民は「市民+銃」になり、若者は「若者+LINE」になる。「テクノロジーへの生成」とは、端的に言って、私たちは技術と結びつくことで以前とは異なる存在へと変化するのであり、その変化をあらかじめ完全に理解することも制御することもできないし、現にしていない、ということである(9)。

テクノロジーをめぐる道具説と自律説の対立を支えているのは、「社会と自然」、「人間と非人間」、「主体と客体」を明確に区別し、両者を一方による他方の制御という非対称的なしかたで関係づける近代社会の根幹をなす発想である。前者が後者を制御するとき、自然を解明し改変する科学技術は人間社会が目的を達成するための道具となり、後者が前者を制御するとき、科学技術は人間社会から自律して社会に一方的な影響を与えるものとなる。だが、ラトゥールによれば、これらの二項対立は諸領域を切り離しそれぞれに「純化」する近代的発想の産物に他ならない。人間から非人間を切り離すことでテクノロジーはそれ自体に固有の機能や利便性を持つものとされ、非人間から人間を切り離すことでテクノロジーを用いる人間はそれ自体に固有の意思をもつことになる。だが、表向きの純化を維持すると同時に、近代社会は両者を暗黙裡に混ぜあわせることで、互いが互いを「翻訳」しながら人間にも非人間にも還元できない新たな行為を生み出す運動を促進してもいる(10)。ちょうど、若者がLINEと結びつくことで「既読スルー」という新たな行為が生まれたように。

特定の最新技術が広く用いられるようになるのは、それが「便利」だからではない。むしろ、多くの人々がその技術と結びつきながら自らのありかたを変容させていくことで、それは便利なものとなる。スマートフォンのユーザーには不便に見えるガラケーは、そのユーザーにとっては依然として便利な道具である。彼／彼女らをスマホへと誘うためには、絶えずアップデートされるアプリや OS を活用し、対面的会話の最中にもスマホをいじってオンラインの対話に参加し、SNS に日常の断片を投稿してシェアするといった、「スマホ人間」としての生きかたを魅力的に示さなければならない。新たな技術が人々を魅了していくプロセスは、その技術と人間がむすびついた第三のエージェントへと人々が変化していくプロセスなのである。

このように考えることが妥当なのであれば、現在の AI ブームを、知能機械へと生成する試みとして

捉えることが可能になる。私たちは、AI を結びつくことで以前とは異なる存在へと変化していく道筋に――その変化をあらかじめ完全に理解も制御もできないにもかかわらず――入りこんでいる、ということだ。何故そのように言えるのか、疑問に思われるかもしれない。科学技術は人類のもっとも理性的な営みの産物であり、そのような無計画な試みであるはずがない。そう感じる人も少なくないだろう。

だが、そうした感覚は、テクノロジーと人間が結びついて生まれるハイブリッドを事後的に人間側の意図や必要性に還元する「純化」に基づいている。私たちは技術を制御できないし、現にしていない。人間の非人間への生成を無視する近代的発想を放棄してしまえば、テクノロジーを、劇的に社会を変える革新的な力として捉える（自律説）と同時に、あくまで人間によって利用され制御されるものとして捉える（道具説）という矛盾に満ちた二枚舌はもはや成り立たなくなる。

近い将来、一説によれば二〇四五年頃に、あらゆる知的能力において人間を超えるコンピュータが登場することを予測する「シンギュラリティ」仮説は、二つの暗黙の条件によって成り立っている。第一に、コンピュータの計算力が絶えず向上することであり、第二に、人間の知的な能力がコンピュータの計算力と比較できる、つまり類比的なものとして把握され

ることである。したがって、「シンギュラリティ」仮説を一笑に付すことができない現状は、私たちが機械との関係において、この二つの条件が真となるような世界のあり方を肯定し現実化しようとする存在へと変容しつつあることを示している。

コンピュータの計算力とは、1と0の組み合わせによって構成されるデジタルな数列、文脈に依存しないデータを処理する能力である。コンピュータにおける計算力の向上は、私たちの脱文脈的な活動を支援し、拡張し、活性化させる。出自や地縁や血縁といった個人を抑圧する制約を弱め、より自由により多様に個々人の意志や能力を展開させることが肯定される現代世界の規範的発想を内面化している限り、私たちが、コンピュータの計算力を絶えず向上させていく試みを止めるための倫理的な根拠を提示することは極めて困難だろう。

同時に、そのような自由な個人のふるまいを担保しつつそれでも一定の秩序を生み出すために、私たちは、他者が理解できる客観的なフォーマットを通じて自らの行為や人格や責任を明らかにすることを互いに要求するようになっていく。個人の内面は、もはや文学や日記や精神分析によって私的に探求されるものではなく、SNSを通じて常に開示され編集され、共有（「シェア」）されるものへと変換されていく。逸脱的な個人への社会的排除もまた、しばしば既存の道德規範や法律に基づいてなされるよりも前に、「炎上」と呼ばれる情報と情動の大規模なシェアを通じた排除の構成によって遂行される。SNSに投稿される喜怒哀楽を伴う人々の日常の一コマは、コンピュータが処理しうるデジタルな数列へと変換される形式に沿うかぎりにおいて他者へと伝わる。同時に、より多彩で自由な自己の表現をデジタルな数列によって補足しうる技術が次々と開発されていく。誰にでも理解できる客観的な情報へと様々な人間的営為を変換していく私たちの「自己」のつくり方自体が、それをコンピュータによる非文脈依存的な記号操作と類比的なものにしているのである。YouTube上のデータをもとにグーグルのアルゴリズムが「猫」の顔を認識できるようになったと言われる。だが、それは膨大な人々が猫の動画をYouTubeにアップロードし、「猫」の一般的なイメージがいまや街角で出会う野良猫よりもオンラインの画像や動画によって形成されているからこそ説得力を帯びている。

もちろん、私たちが今後も、このような仕方で知能機械へと生成し続けていくとは限らな

い。人間とコンピュータの知的な類比性が全く認められないようになるかもしれないし、従来とは異なる仕方で類比性が見いだされていくかもしれない。

シンギュラリティ仮説が説得力を持ちえた二〇一〇年代後半の状況を、後世の人々は驚きをもって振り返るようになるかもしれないし、むしろ遅すぎる判断だったとみなすかもしれない。未来を予測することは本書の目的ではない。だが、テクノロジーへの生成という観点から言えば、そのような未来へとつながっているのは、より高度な知能機械と結びつくことで自らを変容させつつある私たちの現在の営みに他ならない。繰り返しになるが、現在のなかにある未来、その可変性を探ることが本書の目的である。

### 機械人間とジャガー人間

AIをめぐる以上の検討から見えてくるのは、完全には制御できない人間以外の存在との関係を通じて自らを変化させつつある私たちの姿である。合理的に世界を観察し制御する手段として科学・技術を捉える常識的な見地からすれば受け入れがたいイメージかもしれない。だがそれは人間のあり方としてそこまで突飛なものだろうか？ 実際、人々の営みが完全には制御できない人間以外の存在との関係によって規定されるという状況は、世界中の様々な地域に暮らす人々の営みを調査してきた文化／社会人類学の観点から見れば特に珍しいものでもない。

多くの人類学者が指摘してきたように、様々な動物に囲まれながら人々が暮らす非近代社会では、動物に対する制御可能性と制御不可能性が共存しており、しばしば両者のあいだを現実とも虚構ともつかない存在がつないでいる。例えば、エドゥアルド・コーンは、アマゾン川上流域に暮らすルナの人々とジャガーとの両義的な関係性を描きだす。人々にとってジャガーは身近な存在であり、人間によって狩られることもあるが、人間を狩ることもある。その中には「ルナ・プーマ」（「ルナ」は人格、「プーマ」は捕食者およびその典型であるジャガーを意味する）と呼ばれるジャガー人間もいる。彼らは死んだ近親者など人間の魂をもつジャガーであり、人々に食べ物を分け与えてくれるが、人々が狩猟に用いる犬を襲い、人間を被捕食者の地位に貶める危険な存在ともされる。動物と人間を媒介するジャガー人間

は、人々が自らを取り囲む森の様々な生物とつきあう上で、重要な思考と行為の焦点となっている (11)。

こうした動物と人間の関係は一見して奇妙に思われるだろう。だが、私たちの生きる近代社会における機械と人間の関係もまた、同じように捉えることができる。機械は身近な存在であり、人間によって利用されるが (故障や事故によって) 人間を傷つけることもある。その中にはAIやロボットと呼ばれる機械人間もいる。彼らは人間的な知性や身体性を備え、仕事の円滑化や多大な利益をもたらすが、人々の仕事を奪い、人間を被支配者の地位に貶める危険な存在ともされる。機械と人間を媒介する人工知能やロボットは、人々が自らを取り囲む様々な科学技術とつきあう上で重要な思考と行為の焦点となっている。ジャガー人間と同じく機械人間も厳密に定義できない曖昧な存在であり、その形象は人々との対称的な、どちらが上位とも言えない関係のなかで現れる。例えば、多くの研究者にとっては単なるゲーム・プログラムにすぎないだろう将棋ソフトが、トップ棋士を倒す実力を備えるに至って「AIが人間を超えた」と言われるに至ったように。

だが、近代社会には、ここで指摘したような非近代社会との類似性を否定する強力な武器が備わっている。それは現実と虚構 (フィクション) の区別である。犬や人を襲うジャガー人間がルナの人々がみる夢のなかで懐かしい死者の姿を見せるように、人々の仕事を代替するロボットや人工知能もまた、映画や小説やマンガやアニメのなかで人間と親密な関係を築いてきた。動物人間や呪術師や精霊など、人類学者が「一見して非合理的な信念」の産物として捉えてきた存在の類比物もまた、現実と虚構という区別を無視して近代社会を眺めれば、『スパイダーマン』や『ハリーポッター』や『ドラゴンクエスト』などのフィクションのなかに大量に見いだすことができる。だが、近代人は、映画も小説もゲームも身近に存在しない非近代人に「現実／虚構」という区別を無理やり押しつけることによって、「彼らは精霊など実在すると信じているのか！」と驚くことができる。さらに、身近にあるその類比物を指摘されても「これはフィクションとして楽しんでるだけ」と言い逃れできるのである。

ラトゥールは、「自然と社会」、「人間と非人間」、「主体と客体」の峻別によって近代社会は表向きの「純化」を維持してきただけでなく、近代社会と非近代社会という分割をも

生みだしてきたと論じている(12)。近代人にとって、自分たちは自然と社会を正当にも区別しているのに対して、非近代人は両者を誤って混同しているように見える。例えば、社会的に共有された想像の産物にすぎないはずの呪術師や精霊が、あたかも自然の实在であるかのように語られる。両者は区別されなければならない。実在するものは自然科学によって、社会的想像は人文社会科学によって研究されるべき別個の対象である。こうした近代的思考は、非近代社会を探究する人類学にも色濃い影響を与えている。だからこそ、呪術師や精霊は現実に存在するものではなく、人々の主観的な認識の産物、「一見して非合理的信念」として捉えられなければならなかったのである。一方、フィクションのなかで活躍するスパイダーマン(動物人間)やハリポッター(魔術師)の非合理性が問われることはない。それはフィクションであって現実ではないからだ。だが、その区別自体が近代的思考の産物だとすれば、私たちは何か大きな錯誤に囚われているのではないだろうか？

そもそも、「現実／虚構」という区分は決して盤石ではない。「この作品はフィクションであり、実在する、人物、地名、団体等とは一切関係ありません」という常套句が逆説的に示しているのは、現実と一切無関係なフィクションなどありえない、ということである。小説に登場する「中学生」が現実の中学生と、映画が映し出す「ニュータウン」の風景が現実のニュータウンと、マンガで描かれる「T大学」が現実の東京大学と一切無関係であれば、私たちは何を見ているのかも分からなくなる。そもそも関係ないのなら、わざわざ無関係だということはない。この常套句が示しているのは、近代社会においては——「自然／社会」と同じように——フィクションは常に現実と混ぜ合わされながら区別されなければならない、ということである。

ラトゥールが指摘した近代的思考を支える二項対立、「社会／自然」、「人間／非人間」、「主体／客体」に、新たに「現実／虚構」の区分を加えることもできるだろう。現実と虚構を切り離さず両者を横断しながら機械と人間の関係を捉え直すことは可能であり、AIやロボットと呼ばれる機械人間はその格好の対象でもある。「ロボット工学」

(Robotics)という言葉がSF作家アイザック・アシモフの造語であることが示すように、機械人間における現実と虚構の区分は極めて曖昧なものだからだ。実際、日本のロボット開発

における「鉄腕アトム」、米国のAI開発における「HAL9000」（『2001年宇宙の旅』に登場する人工知能）のように、科学者が目指す知能機械のイメージ自体がフィクションに大きく依存している。

クロード・レヴィ＝ストロースが分析したアメリカ大陸の膨大な神話群が示すように、非近代社会における動物と人間の融合は「いつかの過去」、この世界に存在するものの起源が描かれる場において際だって現れる。近代社会における機械と人間の融合は、科学が切り開く「いつかの未来」において夢見られる。彼方にある過去／未来によって現在を基礎づける営みにおいて人間と非人間の融合が想定されるからこそ、「動物／機械人間」は人類が生きる現在を規定し、調整し、改変する契機となってきたのである。

非近代社会における動物人間の形象が示しているように、完全には制御できない人間以外の存在との関係を軸にして社会関係を形成することは人類において珍しくない営為であり、機械人間と対称的な関係を取り結んできた近代人もまた、その例外ではない。機械と人間が結びつくことで生まれる第三のエージェントを、私たちはこれまでも完全には制御などしてこなかったものであり、人間が「自ら作りだした」機械を必ずしも制御できないことは、原子炉廃炉問題を想起すれば一目瞭然だろう。

テクノロジーの素材や使用環境において明らかに人間以外の存在をあてにしているものにも関わらず、私たちは技術を自ら作りだし、それを制御していると思い込んでいる。山の一部に手を加えて見事な里山を作ったからといって土石流の危険は残る。それは、鉱山や実験室から得られた素材で原子炉を作ったからといってメルトダウンのリスクが残るのと一体何が違うのだろうか。里山も原子炉もコンピュータもロボットもAIも人間以外の存在と人間が関わるなかで生みだされる。いずれも人間が無から作り出したものではなく、人間が完全に制御できるものでもない。技術の制御を自明とする近代的発想を離れば、「自然と調和した伝統技術」と「自然を道具化する近代技術」の対立も消えさる。それらは「非人間への生成」のいくぶん異なる道筋として捉え直されることになるだろう。

## 機械カニバリズム

自己によって完全には制御できないものとの対称的な相互作用のあり方を、ブラジルの人類学者エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロは、南米における「カニバリズム」のなかに見いだしている。彼が調査を行ったトゥピナンバの人々において、カニバリズムとは、敵を捕獲し、仕留め、儀礼的に食することに関する入念なシステムとしてある。同じ言語や習慣をもつ民族によって捕らえられた捕虜は、厳かな儀礼が行われるまで、捕獲者たちのそばで十分に長い期間生きることができる。捕虜は行き届いた世話をうけ、儀礼の準備のあいだ、監視を受けながら自由に生活する。これは、他集団の男性を自集団の女性の夫として迎えるときの慣習である。捕虜は義理の兄弟として扱われるのであり、実際かつてのトゥピは「敵」と「義理の兄弟」に同じ呼称を用いていた。儀礼的な食人を通じて吸収されるものは、敵と食するものの関係であり、自己に対する視点としての他性である（13）。

ヴィヴェイロス・デ・カストロが言うように、カニバリズムが「他者の視点から自らを捉え、自己を他者としてつくりあげるための営為」であるとすれば、食人を忌避する近代社会においては、他集団の人間ではなく、人間自身が作りあげた人間と部分的に類似する人工物、すなわち機械を対象として動揺の営為がなされてきたと言えるだろう。実際、ロボットやAIの研究開発においては、「人間に似た機械を作ることによって人間を理解できる」という構想が繰り返し提示されてきた。こうした発想は、近代的思考の端緒の一つであるデカルトの動物＝機械説にまで遡ることができる。

教科書的な説明において「デカルトは、動物や人間の身体を時計などの機械と類比的なものを見なすことで、諸存在は固有の目的や形相を実現する本性を持つとするアリストテレス自然学を否定し、機械と同じく客観的な法則に従うものとして自然現象を把握し説明する近代自然科学の基盤を築いた」とされる。こうした一般的な説明において、デカルトの議論は、機械と生物という比較対象の外部から人間（デカルト）が行った客観的な比較として提示される。一方、動物を含む諸存在の運動の原理をそれらがもつ靈魂や欲望によって説明するアリストテレス自然学は、自然界の現象を擬人化したものであり、分析されるもの（自然）に分析するもの（人間）が誤って投影された、客観的でない主張として提示される。

これに対して、デカルトの動物＝機械説もまた、ある種の擬人化の産物として捉えられることを示したのがジョルジュ・カンギレムである。彼はまず、有機体と機械の間に類比性を見いだすデカルトの議論が、柱時計や懐中時計、水車、人工噴水、パイプオルガンといった一七世紀当時の先端技術に依拠していることに注目する。これらの機械は、斧や槌子といった人間の運動と密接に結び付いた旧来の技術に比べて、それらが円滑に作動しているときには人間の関与なしに自動的に動いているように見え、その限りにおいて自律的に動きまわる動物や人間身体と類似した存在として現れる。だが同時に、これらの機械はその動力を――斧や槌子ほど明示的ではないが――人間の働きに頼っており、特定の目的のために人間によって作られるものに他ならない。機械は、表面的には単体で作動するが、背後では、動力や目的や形態を機械に与える人間と常に結びついているという二重性を持っている。

動物＝機械説は、機械の二重性を自然の事物に重ねあわせることで構成される。自然の事物において「機械を制作し動力や目的を与える人間」に対応するものは神である。一六六二年に出版された『人間論』の冒頭でデカルトは次のように述べている。「身体とは、できうるかぎりわれわれに類似したものにするために神がまったく意図的に形づくった土でできた像または機械以外の何ものでもない、と私は想定する」。この記述に基づいて、カンギレムは、動物＝機械説は次の二つの条件が満たされて初めて意味をなす主張であると言う。それは第一に、動物＝機械（「身体」）を制作するものとして神が存在することであり、第二に、機械の製作に先立って生体がアイデアとして与えられていることである。動物＝機械は、動力因としての神と形相因かつ目的因としての模倣すべき生体が先在して初めて生じる（14）。

このように、動物＝機械説は、神による自然の制作を人間による機械の制作に擬えて把握するという概念操作の産物であり、アリストレス自然学とは異なる擬人化の形式をなす。ここでは、アリストレス流の目的論的な生命理解が放棄されているのではなく、目的論の位置がずらされている。個々の生物の内部に設定されていた諸要因は神がそれを模倣して身体を作る生体のアイデアおよび動力因としての神へと転置され、自然のうちにある合目的性が除去されることで、動物や人間身体をはじめとする自然物はそれに固有の目的や靈魂を奪い取られ客観的な規則に従う存在＝機械として把握される。こうした理論上の「生命の機械化」

を通じて、自然物や動物の技術的な利用が正当化される。カンギレムは、この発想が西欧人の典型的な姿勢の前提をなすと指摘した上で、それを次のように定式化する。

人間は、いかなる自然的な合目的性をも否定する場合にのみ、また、一見して靈魂を有するように見える自然を含めて、自己自身の外にある自然全体を手段とみなすことができる場合にのみ、自分を自然の主人にして所有者とすることができるのである（15）。

デカルトの動物＝機械説は、その一般的な理解に反して、対象（動物・機械・人間）を外部から分析者（人間）が客観的に分析するような外在的な比較とは言い切れない。機械に関してはその製作者として、生物に関してはその一部として、人間（比較するもの）は比較される対象に内在している。だが同時に、デカルトの議論はこうした比較の内在性を捨象することで成立している。まず、機械に特定の目的や形態や動力を与える製作者たる人間の存在が捨象されることで、客観的な規則に従って自律的に動作する機械の姿が得られる。そうした機械と類比的な存在として生物一般を捉えることで、目的因・形相因・動力因が生物の内部から収奪され、製作者としての神へと移動する。そして、信仰と理性を通じた神との関係によって、人間の半身である「人間精神」（思惟）が他の生物や人間身体（延長）が属する自然界から抜け出し、「自然の主人にして所有者」としての地位を獲得する。

デカルトが切り開いた「機械のカニバリズム」は、機械という他者の視点から自己を捉えることによって、人間を精神（思惟）と身体（延長）に分割する。こうした分割は、両者がいかに結びつきうるのかという有名な難問を生み出したが、それ以上に困難な問題は、そもそも私たち人間のありかたにおいてどこまでが「身体」でどこからが「精神に」相当するのかが全く自明でないことである。さらに、機械は人間が作りあげるものである以上、動物と違ってどのような形態や性質をもつようになるかはあらかじめ決定されない。機械には常に、「近い未来において」従来とは全く異なるものへと変化する可能性がある。したがって、デカルトが生きた時代に作られた精巧な機械人形（オートマトン）がさらに発展すれば、人間に近い身体的機能をもつ機械があらわれるかもしれないし、人間そっくりにふるま

うことができる機械が作られれば、それが人間的な精神をもつようになる可能性も否定できない。こうして、近代人は、「いつか近い未来に人間と同等な機械が作られるかもしれない」という予測を、希望と恐怖をないまぜにしながら、うわごとのように繰り返すようになったのである。

ただし、人間へと接近する機械に対する近代人の両義的な態度は、文学やSFや映画において表現されてきただけではない。カンギレムが言うように、動物と機械を同一視する概念操作によって、自分自身の外にある自然全体を手段としてみなすことが理論的には可能になったとしても、実際に人間が「自然の主人にして所有者」としてふるまうためには、自然を解明し制御する技術、より高度な機械が必要となっていく。それらの機械は、人間には不可能な速度や力や運動性を備える方向へと発展すると同時に、それらを制御する人間自身の身体と精神を機械において再現し、それを支援し拡張する方向にも発展する。重工業機械の開発が進み、生活の全域に物理的機械が配置される人工的な空間が世界中に広まっていく二〇世紀後半から二一世紀初頭にかけては、人工的空間自体を把握し制御していく人間の知的能力と、それを代替・支援する情報技術が大きな社会的関心を集めていく。こうした軌跡の延長線上において、情報処理機械という他者の視点から自己を捉え、機械が処理するデジタルな数列と自らの生を結びつけることで、機械の能力を自らの心身に摂取していく、機械のカニバリズムが現れているのである。

## 人間なきあとの人類学

見落としてはならないのは、デカルトの動物＝機械説が、実在する神をその不可欠な構成要素としていることである。人間が自然の「主人にして所有者」としてふるまえるのは、創造主である神と人間精神との間に透明な連絡通路が確保される限りにおいてである。

だが、人々が世界を正確に認識し、適切に世界に働きかける最終的な根拠としての実在する神は、カントが推進した理性批判を通じて次第にその必要性を弱めていく。世界の最終的な根拠としての実在する神は、到達しえない「もの自体」に置き換えられ、その代わりに、人間の経験的な領域から経験を規定する条件を構成する超越論的な主観のあり方（人間理

性)によって、世界を適切に認識し適切に働きかけることの根拠が生みだされる。ミシェル・フーコーが「経験的-超越論的二重体」と呼びなした、こうした人間の両義的なあり方において、世界の最終的な根拠たる権能が、実在する神から人間に部分的に委譲されていく。

こうしたカント主義的発想は、二〇世紀初頭に確立された社会／文化人類学（以下「人類学」と表記）とその旗印となった文化相対主義にも色濃く継承されている。だが、人類学は、世界中に暮らす人類の経験的な多様性にどこまでも注目する学問でもある。超越論的な理性において一なるものであるはずの「人間」は、その経験的な多様性において見いだされる、食人や呪術やトーテム信仰といった「一見して非合理的な」実践によって激しく動揺させられる。人類学は、一なるものとして超越論的な人間を一方に置き、極めて多様な経験的主体としての人間を他方に置いたうえで、両者の対立と調停がはかられる場として機能してきた(16)。

その主な調停策の一つが、文化相対主義に他ならない。「自然の事物としては同じものが文化によって異なる仕方で認識され意味づけられる」という文化相対主義の発想は、自然を解明する近代科学に特権的な位置を与えることで、「未開人」と呼ばれてきた人々に、世界を認識し解釈する権能、すなわち「文化」を割り当てることを可能にした。だが、こうした発想においては、異なる仕方で認識される「同じ世界」が自明の前提とされ、どこまでが「同じ世界」でどこからが「異なる認識」なのかの境界線自体を設定する権能が、暗黙のうちに人類学者を含む近代人に与えられている。

これに対して、「存在論的転回」と呼ばれる、二〇世紀末から今世紀初頭にかけての現代人類学の展開は、「一なる自然と多なる文化という二項対立の放棄」というラトゥールらによって提示された発想を、その学問的伝統である「現地の人々が生きる世界を彼らの視点から捉える (from the native's point of view)」という研究指針といかに接続するかという問いにおいて把握される。近代科学が最も的確に把握しうる現実に存在する世界が一方にあり、他方にそれを認識する異なるやり方(世界観)がある、という既存の設定を批判する存在論的転回においては、彼らが生きる世界を「現実に存在する世界」といかに結びつけていくかが

改めて問題となっていく。土台となるのは、彼らが生きる世界は現実に存在する世界を彼らなりの仕方で作ってあげていく実践の産物である、という実践論的な発想である。世界を作り上げていく様々な実践が世界に対する様々な認識を妥当なものとする（17）。そこにおいて、文化は単なる世界観の発露ではなく、様々な仕方で作成し認識する実践の産物、文化＝自然として捉え直される。

だが、問題はそうした複数の文化＝自然を俯瞰し比較する超越論的な視点を、人類学者は持ちえないことにある。比較の前提となる「同じ世界」はもはや、人類学の分析概念によっても人類学が暗に前提としてきた素朴实在論（科学的知識と世界の厳密な対応）によっても正当化されない。

全体を俯瞰する根拠が絶たれた時、私たちにとって異質な人々が作り上げる世界（文化＝自然）を対象とする人類学的分析は、彼らが生きる世界との比較を通じて私たちが現実に存在する世界だと考えているものの前提やその可変性を示す営為として捉え直される。「人類学の哲学」を推進するフランスの哲学者パトリス・マニグリエが述べるように、そこで問題となるのは「人々が存在すると述べるもの全てが実際に存在すると認めることにあるのではなく、むしろ《私たちの》世界において現に存在しているものとの《差異》においてより良く理解すること」となる（18）。

存在についての自他の見解の違いは、世界に存在する同じ事物に対する認識の相違ではなく、「そもそもこの世界に何が存在するか」に関わる相違として現れる。突飛な話だと思われるかもしれない。だが、例えば「靈感」の強い友人と接する時、しばしば私たちは霊が実在する世界を彼／彼女が生きていることを多かれ少なかれ受けいれていないだろうか。あるいは、真昼のオフィスでは霊の実在など気にも止めない人であっても、真夜中の霊園では「何かいるかも」という想いを切り捨てることは難しいだろう。私たちが生きる世界は全て同じではない。かといって、個人（あるいは文化）毎に全く異なる世界を生きているわけでもない。個々人の中で、あるいは個々人の内部で、それらは共存しながら部分的につながっている。

世界は一つではない。だが複数の独立した世界があるわけでもない。人類学者マリリン・ストラザーンの言葉を借りれば、この世界は「一よりは多く、複数よりは少ない（more than

one, and less than many)」(19)。そして、誰もがそれらの部分的につながった世界を生きているのであれば、それらの全体を一望のもとに俯瞰できる「人間」など存在しないことなる。複数の文化を俯瞰する根拠となる「経験的＝超越論的二重体」としての人間のあり方を前提としない比較のあり方を、本書では「人間なきあとの人類学」と呼ぶ。それはまずもって、この世界に存在するものについて異なる見解をもつ存在者同士の相互作用が、統一的な基準がないままに把握され変容していくプロセスに関わるものとなる(20)。

こうしたプロセスはまさに、発達しつづける知能機械と人間の相互作用に見いだされるものでもある。AIやロボットと呼ばれる知能機械は、その技術的特性からいって人間と部分的に近く、部分的に遠い世界を生きている。例えば、ヒューバード・ドレイファスやジョン・サールが20世紀末に展開した古典的計算主義批判は、知能機械が認知し行動する世界のありかたにおいて、私たち＝人間が生きる世界に存在するもの(「常識」や「意味論」や「志向性」)が欠けていることを指摘した議論として読むことができる(21)。「機械に人間的知性を実装できるか」という計算機科学が掲げてきた問いに対する批判として展開された彼らの議論とは異なり、本書で焦点を当てるのは、それぞれが「存在についての異なる見解をもつ他者」である知能機械と人間の相互作用の局面である。

これまで論じてきたように、AIと呼ばれる知能機械が、あらゆる技術がそうであるように人間によって完全に制御される存在ではないのであれば、機械と人間の相互作用は、それぞれに異なる世界を生きるもの同士の関わりとして捉え直される。知能機械へと生成しつつある私たちの現在、そのなかにある未来の可変性は、なによりもまず、人間と知能機械の具体的な相互作用の場面を詳細に検討することによって探りだされるだろう。次章からは、将棋電王戦を中心として現代将棋におけるプロ棋士と将棋ソフトの相互作用の軌跡を追跡し、知能機械との結びつきを通じて私たちはいかなる仕方に変容しつつあるのかについて考察する。

注

- (1) Carl Benedikt Frey & Micheal A. Osborne 2013 The Future of employment: How Susceptible are Jobs to Computerisation? *Technological Forecasting and Social Change* 114, pp. 254-280.
- (2) 井上智洋 2016 『人工知能と経済の未来 2030年雇用大破壊』 文藝春秋
- (3) Stephen Hawking, Stuart Russell, Max Tegmark, and Frank Wilczek 2014 ‘Transcendence looks at the implications of Artificial Intelligence - but are we taking A I seriously enough?’ 「Independent」紙、2014年5月1日記事。
- (4) 宮武公夫 2000 『テクノロジーの人類学』岩波書店、74-75頁。
- (5) Pinch, T. P., & Bijker, W. E. 1987 The social construction of facts and artifacts: Or how the sociology of science and the sociology of technology might benefit each other. In W. E. Bijker, T. P. Hughes, & T. J. Pinch (Eds.), *The social construction of technological systems: New directions in the sociology and history of technology*, pp. 17-50.
- (6) Bruno Latour 1999 *Pandora's Hope: Essays on the Reality of Science Studies*. Harvard University Press, p179, figure6.1 (括弧内および欄外は筆者による)
- (7) 「LINE」でスマートフォン世界ナンバーワンへ」BLOGOS 2013年1月1日記事 (<http://lite.blogos.com/article/53141/?axis=&p=2> 2017年3月1日閲覧)
- (8) 濱野智史 二〇〇七 「濱野智史の情報環境研究ノート 第五回 『疑似同期型アーキテクチャ』と『真性同期型アーキテクチャ』」 WIRED VISION アーカイブ (<http://archive.wiredvision.co.jp/blog/hamano/200706/200706210340.html>)
- (9) 以下を参照のこと。久保明教 2016 「非人間への生成——非連続的思弁と連続的実践の狭間で」『現代思想』44(20)：194-209、青土社。
- (10) Latour, *ibid*: pp. 13-14
- (11) エドゥアルド・コーン 2016 『森は考える——人間的なるものを越えた人類学』、奥野克巳・近藤宏 [監訳]、亜紀書房

- (12) Bruno Latour 1993 *We Have Never Been Modern*, translated by Catherine Porter, Harvard University Press, pp.97-103.
- (13) ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド 二〇一五 『食人の形而上学 ポスト構造主義的人類学への道』 檜垣立哉・山崎吾郎（訳）、洛北出版、一八八～一九六頁。
- (14) ジョルジュ・カンギレム 二〇〇二 『生命の認識』 杉山吉弘（訳）、法政大学出版局、一一四～一四六頁。
- (15) 同書、一二六頁
- (16) 文化／社会人類学が主な対象としてきたのは、経験的-超越論的二重体としての人間を統一体として捉えることを阻むような存在である。「野蛮人」、「未開人」、「辺境の人々」、「現地民」。どのような名称を用いようとも、人類学者が自らの暮らす社会には存在しない奇異な営みを探し求める限りにおいて、それらの対象は人間の経験的な多様性において超越論的な人間の普遍性を揺るがす存在でありつづけている。結局のところ、人類学の対象たる「人類」とは、自分たちと同じ「人間」とは思えない人々を内在的に理解し外在的に分析することにどうしようもなく惹かれてきた研究者たちが案出した、苦肉の折衷案にすぎないのではないだろうか。同じ人間とは思えない、でもおなじ人間のはずである。だからこそ、彼らを、自然人類学の対象とは異なる意味で「人類」と呼ぶことになる。
- (17) 久保明教 二〇一一 「世界を制作＝認識する：ブルーノ・ラトゥール×アルフレッド・ジェル」 春日直樹編『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』 世界思想社、三四-五三頁。
- (18) Maniglier, Patrice. 2014 A metaphysical turn? Bruno Latour's An Inquiry into Modes of Existence. (Translated by Olivia Lucca Fraser) *Radical Philosophy* 187: 37-44, p38.
- (19) Strathern, M 1991 *Partial Connections*. Savage, MD.: Rowman and Littlefield, p35.
- (20) 以下を参照のこと。久保明教 二〇一六 「方法論的独他論の現在——否定形の関係論

へ』『現代思想』44(5): 190-201 頁、青土社。

- (21) 以下を参照のこと。ドレイファス、ヒューバート・L. 一九九二 『コンピュータには何ができないか——哲学的人工知能批判』黒崎政男・村若修（訳）、産業図書。サール、ジョン 一九八四 「心・脳・プログラム」 『マインズアイ コンピュータ時代の「心」と「私」』ホフスタッター, R.D & D.C. デネット（編）、坂本百大（監訳）、TBSブリタニカ 178-210 頁